

## 井上勤の『月世界旅行』

——本邦初の本格サイエンス・フィクション——

川戸道昭

今わたしの手もとには、一八七三年にロンドンで発行されたジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』の英訳本がある。<sup>①</sup>ヴェルヌの英訳を数多く手がけたことで知られるサンプソン・ロウ社から出版されたもので、『地球から月へ』と『月世界一周』が一冊に収められている。一方その傍らには一八八〇（明治十三）年に、井上勤が大阪の出版社から刊行した『月世界旅行』の邦訳本がある。<sup>②</sup>『地球から月へ』の訳、明治十四年三月第十巻刊了。そこには「此書ハ……米國チカゴ府『ドン子リイ、ロイド』商会ノ發兌ニ係リ」とあるから、わたしが所有するサンプソン・ロウ社の英訳書を用いた翻訳ではないことは確かである。しかし、直接の底本ではなかったとはいえ、両書を細かく照合してみると、井上の翻訳をみただけではよく判らなかつたおもしろい事実がいろいろ浮かびあがってくる。それらの事実をもとに、黎明期の翻訳文学がおかれていた状況について、三気がついたことを書きしるしてみることにする。

ヴェルヌの『月世界旅行』正確にいえば『地球から月へ』<sup>③</sup> (De la Terre à la Lune) という作品がフランスで発表されたのは一八六五年、すなわち日本の年号に置き換えると慶応元年のことであつた。日本がいまだ泰平のねむりから覚めやらぬ徳川の治世に、西洋では、すでに宇宙を視野に入れた壮大な構想のサイエンス・フィクションが人々の心を魅了していたというのである。参考までに、物語の概要を簡単に紹介するところいうものだ。舞台となっているのはアメリカ・メリーランド州、ボルチモア。そこに本拠を構える銃砲製造会社の社長が、ある日、全社員を一堂に集めていうには、独立戦争の終結以来、近頃は戦火も途絶えて、われらが精を凝らした大砲も霹靂天地を振動させる機会がすっかり失われてしまった。今はただ次なる大戦の機会を座してまつよりほかはないという状況にあるが、われわれとしてはそんな消極的な姿勢であつてはなるまい。今こそ、わが社員を再び有用の士となすべく、コロンプス以来の一大事業に乗り出すときである。すなわち月に有人の巨大弾丸を打ち込み、かの地を精査

探索の上、できることなら合衆国の第三十六番目の州に加えようではないか、と。勇ましさにかけては、かのレーガン大統領がスター・ウォーズ計画においてぶちあげた怪気炎にも劣らない。最近では、テロ組織の壊滅に腐心するブッシュ大統領が「悪の枢軸」を想定して練り上げた戦略構想にもひけをとらない壮大な計画である。舞台をヴェルヌの祖国フランスではなく、トゥリガー・ハッピー（銃砲の発射が大好き）なアメリカとしているところが、まるで百数十年後の未来を言い当てているようですこぶる妙だ。

ヴェルヌのこの作品が発表された当時、日本は、いまだ、列強諸国に対して国の門戸を開く開かないでゆれにゆれていた幕末の動乱期にあった。そのような時代に海の内こうでは現在の宇宙戦略構想を彷彿させるようなサイエンス・フィクションが人々の心を捉えていたというのである。われわれは、西洋と東洋の間に存在した文明上の落差というものにあらためて大きな驚きを感じないわけにはいかない。しかし、一八六五年という時点では天と地ほどもあったその落差も、ひとたび日本の門戸が開放されるや、西洋の文物を驚嘆のまなざしで仰ぎ見る人々の手でみるみるうちに埋められていった。その底流に存在した（文明憧憬）のエネルギーがどれほどすさまじいものであったかは、イギリスで一八七三年にはじめて英訳された『月世界旅行』が、わずか七年後の一八八〇年に井上勤の手で翻訳されるという事実一つをとつてもわかる。シェイクスピアもディケンズもいまだその主要作品の梗概さえ知られていなかった時代に、ヴェルヌのサイエンス・フィクションだけは井上をはじめとする何人かの手によって翻訳され読書界に突出していたというのである。人々がそこに見いだしたのは、西洋文明がわれわれ人類にもたらしてくれるであろう無限の夢と可能性であった。彼らはその夢と可能性が一つ一つ具体的なたちで描き出されたヴェルヌの作品をひもとくことによって心に激しく燃えさかる文明への飢餓感を満足させる一つの手段としていったのである。

井上勤の『月世界旅行』は、数あるヴェルヌの翻訳作品の中でも川島忠之助の『新八十日間世界一周』④（明治十一年前篇発行）に次いで二番目に古いものであったが、その翻訳でとくに注目を要するのは、柳田泉も指摘するように、「漢文口調と和文調を七分三分にませた」、いわゆる「周密文体の先駆」⑤と目されるような一種独特の文体である。われわれ現代人の感覚からするとやや古めかしいという感じは否めないが、当時の人々にはそのような伝統的な日本語の響きをとどめた文章がかえって魅力となっていたようで、泉鏡花を初めとして彼の文章を愛好した読者・知識人は少なくなかった。鏡花は同じ井上の訳した『アラビアンナイト』⑥（明治一六年刊）を評して、「初めて本を読む時にアラビヤナイトを読んだ位の心持のものは、なかなか出」てこないと賛辞を贈っている。同じことは『アラビアンナイト』の三年前に発表された『月世界旅行』においてもいえることで、たとえば、物語の終盤におかれた巨大弾丸が月に向かって打ち上げられる場面は、次のような力強い簡潔な文章でつづられている。

「二十五秒、三十六秒、三十七秒、三十八秒、三十九秒、四十秒 放火

一発の砲声、天地も為に粉末となりたるかと訝るばかりの大振動にして、其振動は、古今天地間に於て譬ふる物なく、亦た固より之が景況の一端を名状たるも、言辞の適すべきなし。弾丸天に冲するの後、火煙一帯天地を蔽ひ、恰も火煙の一世界を現出するに似たり。万衆は皆な悉く唯火煙のみを見て、弾丸の飛行を見得たるもの一人としてあらざりしとかや。」

“Thirty-five!—thirty-six!—thirty-seven!—thirty-eight!—thirty-nine—forty! Fire!!!”

An appalling, unearthly report followed instantly, such as can be compared to nothing

whatever known, not even to the roar of thunder, or the blast of volcanic explosion! No words can convey the slightest idea of the terrific sound! An immense spout of fire shut up from the bowels of the earth as from a crater. The earth heaved up, and with great difficulty, some few spectators obtained a momentary glimpses of the projectile victoriously cleaving the air in the midst of the fiery vapours!

井上が用いた英訳の原本が入手できないので代わりにサンプソン・ロウ社版の英文を掲げておいたが、これと比べてみても、発射前の秒読みから、その直後の天地を揺るがす大振動、さらには目にもとまらぬ速さの弾丸の「飛行」にいたるまで、その所要所をきちっと押さえた翻訳となっている。「三十五秒、三十六秒、三十七秒」と秒刻みのカウントダウンならぬカウントアップを原作どおり一字一句違えずに訳出することによって発射直前の緊迫した空気を伝えようとする手法の新しき、あるいはその緊迫した空気によくマッチした力強い響きの翻訳文体、さらには、二十八章に分かれた原作の物語をきちっと「二十八回」分に区切つて、各章ごとにその要点を簡潔な文章で訳出しようとする真摯な翻訳態度、そうしたいくつかの要素が相まって、このように明治十年代前半の他の文学作品には例をみない斬新な趣向の翻訳作品が出現したとみることができらる。細部の描写といい、作品全体の構成といい、これは間違いなく明治十八年に発表された『諷世 嘲俗 繫思談』の先駆をなす翻訳作品といえる。そこに用いられている翻訳文体にしても、西洋文学にそなわる「精緻ノ思想」を写しとるための新たな文章の創造を目指して考案された『繫思談』の翻訳文体に先行する画期的な文体とみて間違いはない。

想像して余りあるのは、この書物を手にした明治十年代の人々の心の裡である。国の扉が開かれた途端に、彼らの眼前に現れたのは、国境ばかりか宇宙の扉を開いてみせるというとても構想の作品であった。明治の知識人たちはこの彼我の文明の差をまざまざと見せつける書物を一体どんな思いで受けとめたのか。まったく理解の埒外にあるものとして放り出してしまった人も少なくなかったに違いない。しかし、時はあたたかも文明開化の世の中である。ヴェルヌの空想科学小説を空高く舞い上がらせるだけの科学熱が吹き荒れていた。そうした風を頼りに『月世界旅行』の翻訳に乗り出したのが、ほかでもない明治前半の翻訳文学界の最大の功労者・井上勤であったというわけである。それを訳したのが「周密文体」の先駆者ともいわれる井上であったということは、当時の読者にとって限りなく幸運なことであった。日本のSF小説はそれが緒につく当初から一定水準の精度と質が確保されることになったのである。

井上の『月世界旅行』で注目しなければならないのは、こうした巧みな文章表現に加えて、もうひとつ、合計二十一葉にも及ぶ精巧な銅版画の存在である。それは西洋の事情に通じていない読者の想像力を助けるべく、各巻にそれぞれ二葉ずつ（二巻のみは四葉）挿入されているもので、たとえば先に引用した文章にはページに掲げたような挿絵が添えられている。右端に「大阪響泉堂銅刻」の文字がみえるところから、日本で制作されたことは間違いないが、一見してわかるように、何か西洋の原画を下敷きにして描かれた印象が強い。そこで、先ほどのサンプソン・ロウ社に由来するものであることがわかった。この翻訳は訳文ばかりか各巻に挿入された挿絵までもが原本からの翻刻であったのである。

サンプソン・ロウ社が発行した一八七三年の英訳本は、ブルーの表紙に金と黒で大弾丸が月に発射される様子が描かれた美装本で、扉を開くと目に飛び込んでくるのは、その弾丸が蒸気機関車のように四連の客車を引いて月に向かっていく様子伝える銅版画である。弾丸には黒煙をなびかせる煙突がみえ、客車の一つ一つには車窓がついていて人間らしきものが顔をのぞかせている。まるで宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の発想の原点を想起させるような描写である。この口絵をはじめとして、本書には『月から地球へ』の部に四十葉、『月世界一周』に同じく四十葉の銅版画が添えられている。全文が三百二十頁ほどのものだから、ほぼ四頁に一葉の割合で挿絵が付されていることになる。イギリスで発行された他の英訳本はこれとは異なる挿絵を掲載している

ころから、井上が使用した原書というのはこのサンプソン・ロウ社の英訳と何らかの点でつながりのある書物であった可能性が高い。

ともあれ、月世界旅行の一部始終を豊かな想像力をもって描き出したこれらの一連の銅版画は、今でいうならば、さしずめ最新のSF映画、なしは宇宙飛行のテレビ中継にも相当するものだろう。アメリカの国旗で飾られた巨大弾丸が人に見守られながら打ち上げ台（砲台）に運ばれていく様子といい、宇宙ロケットさながらの弾丸の内部の様子といい、さらには火煙とともに勢いよく空に向かって発射される砲弾の状況といい、現在の宇宙ロケットの打ち上げ状況とも不思議に重なりあうものがある。実際、アメリカのアポロ計画における宇宙船（九号）は、ヴェルヌの小説と同じように、フロリダ州から打ち上げられて太平洋上に着水する。宇宙船の重さも同じならば、高さも同じ、着水した場所にいたってはわずか二マイル半の違いしかなかったというように、ヴェルヌの小説との神がかり的ともいえるような一致点が見出<sup>1)</sup>される。

井上の翻訳にはこうした現在の宇宙飛行とも不思議に重なりあう全四十葉『月から地球へ』の原画のうち、二分の一強に相当する二十二葉が翻刻され掲載されている。それは、原作のもつ醍醐味を可能なかぎり再現していきたいという翻訳者・出版者の意図を視覚的に象徴する精巧細緻な銅版画であった。それらの二十二葉の挿絵が開国後間もない明治の人々の心に呼び起こした興奮は、おそらく今日われわれが日本人の乗り込んだスペースシャトルの打ち上げをテレビ画面で見守るときに興奮にも似たものがあつたと想像される。百数十年前の視覚媒体が引き起こした興奮としては、他を寄せつけない圧倒的な迫力を伴うものであつたに違いない。

忘れてならないのはこの作品が発表されたのが、坪内逍遙の『小説神髓』が公にされる五年も前のことであつたということである。そんな独自の創作文学さえもに存在しない時代に、日本の読者はすでに欧米で流行したサイエンス・フィクションのおもしろさを丸ごと伝える作品を享受することができたのである。多少大袈裟なもの言い方を許してもらえば、日本の文学は、ことSFという分野にかぎってみるならば、『竹取物語』の世界から一気に『宇宙戦艦ヤマト』の世界へとタイムスリップしたような感じさえする。

井上の『月世界旅行』の銅版画をみるたびにわたしの脳裏をよぎるのは、日本の近代文学は決して一般の文学史などで言い古されてきたような型どおりの筋道をたどって今日の状況にいたつたのではないという確信にも似た想いである。

注

(一) *From the Earth to the Moon Direct in 97 Hours 20 Minutes, and a Trip round It*, translated by L. Mercier and E. E. King, Sampson Low, Marston, Low, and Searle, London, 1873.

- (2) 井上勤『<sup>九十七時</sup>月世界旅行』(1)三月、(2)五月、(3)九月、(4)一〇月、(5)十一月、(6)一〇一四年三月) ①⑤黒瀬勉二出版、⑤⑩三木美記出版。
- (3) *De la Terre à la Lune, trajet direct en 97 heures*. 2pt. Paris, 1865-1869.
- (4) 川島忠之助訳『<sup>新</sup>説八十日間世界一周』川島忠之助出版、前編・明治一一年五月版權免許、後編・明治一三年六月出版御届。
- (5) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、一九六一年九月) 五五頁。
- (6) 井上勤『全世界一大奇書 原名アラビヤナイト』(明治一六年から一〇冊分冊にて刊行)。分冊本の原本を目にしていなかったために出版元は不明だが、明治一八年以降大野堯運をはじめ何人かの出版者が同書を二冊ないしは一冊にまとめて刊行している。
- (7) 「新潮合評会 第二三回 (文壇思ひ出話)」『新潮』四二巻四号(新潮社、一九二五年四月) 一四四―四五頁。
- (8) 井上勤『<sup>九十七時</sup>月世界旅行』第一〇巻、一二頁。同版は仮名がカタカナ表記で読みにくいため、ここでは一八八六年九月刊行の合本再版から引用。『<sup>九十七時</sup>月世界旅行』(三木佐助、一八八六年九月) 二七一―七二頁。
- (9) *From the Earth to the Moon*, pp.136-137.
- (10) 『<sup>諷世</sup> 繫思談』が初期の翻訳文学の流れを一新する上で果たした革命的な役割については、拙稿「リットンの小説と初期の翻訳文体」『リットン集』明治翻訳文学全集(新聞雑誌編) 14 (大空社、二〇〇〇年一〇月) 三八三―四一六頁参照。
- (11) Jean Jules-Verne, *Jules Verne, Macdonald and Jean's*, London, 1973, p.93.